

三井貴世良

立体スクリーンとプロジェクタを用いた空間表現の研究

私は以前から、透明や半透明な素材に強い興味を持っていた。実体があるようで無いような儚さ、光が反射した時のきらめき、他素材との相性の良さなどが魅力的に感じられる。3年次の実習では透過性の高いチュール布と、プロジェクタを用いたインスタレーション作品を制作した。その過程で、半透明素材に映像を映すことによって生まれる空間の面白さに気づき、半透明素材とプロジェクタを用いた表現について更に追求していきたいと考えた。

研究題目にある“立体スクリーン”という語は、一般的にプロジェクタの投影時に使用する平面的なスクリーンと区別するために、本研究において使用する造語である。

スクリーンには、玩具用(一般に“ガチャガチャ”などと呼ばれる)カプセルを用いる(図1)。サイズは直径75mm、色は乳白色のセパレートタイプ、表面にナイロンたわしで研磨加工したものを使用する(図2)。研磨して表面に細かい傷が付くことで、プロジェクタで投射した光が拡散し、カプセル自体が発光している様に見えることに面白みを感じたためである(図3)。

個々のカプセルをどのように配置するか、また、プロジェクタの投射角度を考慮しながら検討するために、実寸の1/5縮尺のマケットを用意し、実際にプロジェクタを使用しながらカプセルの位置を調整し、検討した。この際、効果的な演出効果を期待するためにプロジェクタを二台使用し、また、観覧者が作品の前に立っても影ができないよう工夫しながら調整を行った(図4)。

球体であるカプセルだけに、プロジェクタから投影する際には、投影映像を円形のマスクで描画する必要がある。また、個々のカプセルに投影する映像の位置調整は、全てコンピュータ上の手作業で行い、映像制作にはPremiereProを使用する。本制作では、対置された二台のプロジェクタを使用し、二方向から異なる映像を投影する。こうすることで、カプセルのおもて面から見た作品の表情と、うら面から見た表情、片方ずつの変化が楽しく、更にはカプセル内部で両方からの映像の融合も鑑賞することができる。この特徴を活かし、効果的な演出をしたいと考えた。

半透明のカプセルという小さく儚いものを255個使用し制作するにあたって、個々のカプセルとしての存在感と、集まった全体の存在感の両方を大切にしたいという思いが当初からあった。そこで、二台のプロジェクタのうち、片方のプロジェクタの演出を“群”をテーマに、もう片方を、日頃私が興味を惹かれている“時間”をテーマに演出することにした。

“群”の演出では、カプセルに“*(アスタリスクマーク)”を投影し、その“*”が回転、拡大縮小、点滅といった動作を繰り返すことで、まるでカプセル内部に生命体が宿っているような演出を目指す(図5)。“時間”の演出では、カプセル全体をひとつの樹木と見立て、四季の移り変わりによる葉色の変化をイメージした演出を試みる(図6)。また、両方の映像の再生時間をずらすことにより、周期ごとに見える印象が変化する構成とした。こうすることで、片側の映像内容の動作を詳しく見ることができたり、意図せず偶然生まれた見え方の面白さも期待できるのではないかと考えたためである。

本制作では、上記のような内容を効果的に実現するために、作品や使用する機材の設置方法、また会場設営についても十分検討する必要がある。それらを踏まえ、観覧者が引き込まれるような幻想的なインスタレーション作品を目標にして制作を進めていく。

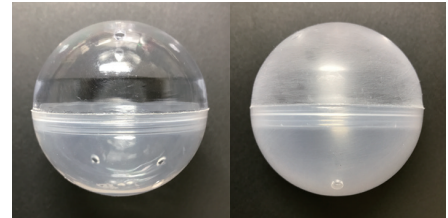


図1

図2



図3



図4

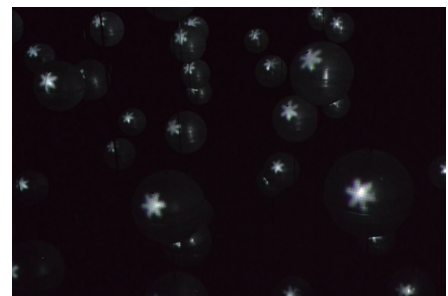


図5

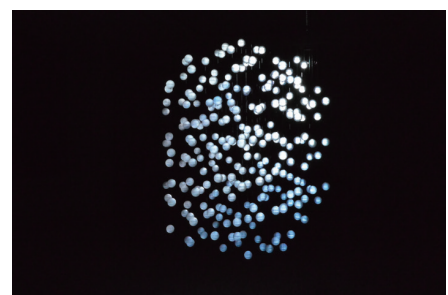
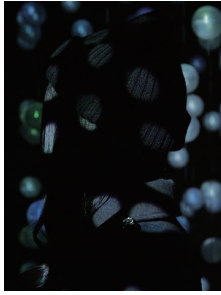


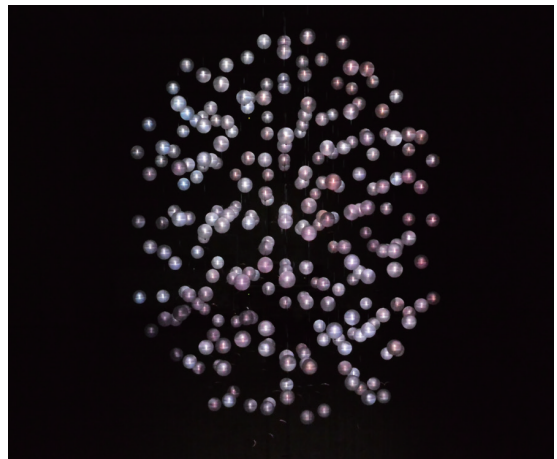
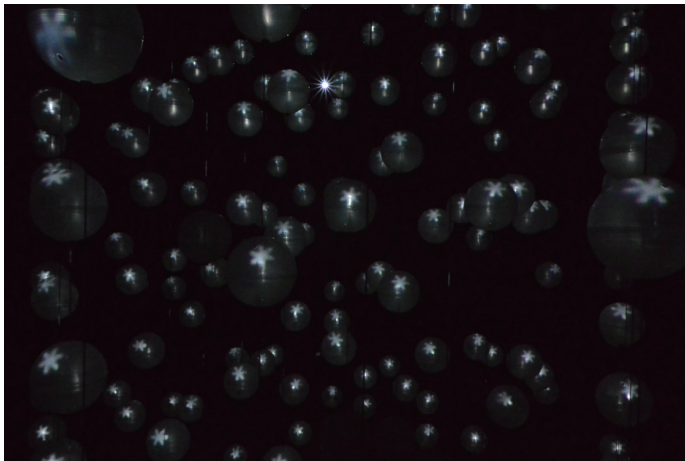
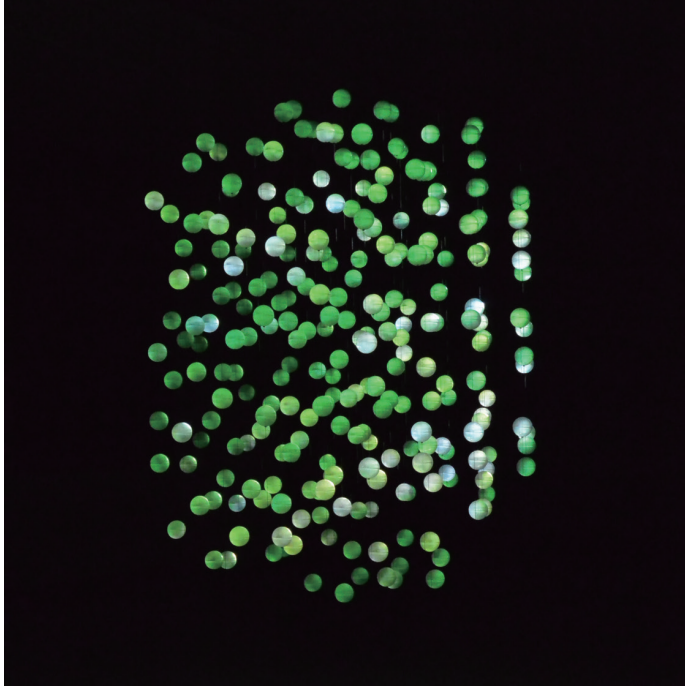
図6



三井貴世良

lucent

玩具用カプセルとプロジェクタによるインスタレーション、2.0 w × 2.0 h × 2.0 d (m)



〈概要〉

半透明素材である玩具用カプセルで構成された「立体スクリーン」と、プロジェクタによる映像投影によって幻想的な空間を創り出す。

玩具用カプセルに表面加工を施したものを255個吊り下げ、個々のカプセルにプロジェクタより映像を投影させた作品を制作する。

タイトル「lucent」は、「光る・輝く」といった意味をもつ他、「透明な」という意味も含まれており、本制作で要となっている「立体スクリーン」にマッチした語であることから、タイトルとして選んだ。

投影内容を含めた作品全体の演出内容については、個々のカプセルとしての表現と、集まった全体としての表現を重視して演出を構成した。具体的には、立体スクリーンの両側に配置された二台のプロジェクタから投影する映像をそれぞれ、「群」と「時間」をテーマに制作し、「群」では個々のカプセルに生命体が宿っているような演出を、「時間」では作品全体をひとつの樹木に見立て、四季の移り変わりによる葉色の変化をイメージした演出を試みた。出力時間の異なる映像を投影することで、ふたつのプロジェクタから投影される映像のサイクルが徐々にずれ、見る時によって見え方が変化する演出構成となっている。

〈制作環境〉

Adobe Photoshop, Adobe Premiere Pro